

2014年10月27日
慶應義塾大学 SFC 研究所慶應義塾大学 井庭崇研究室、認知症フレンドリー社会の実現に向けて
“認知症とともによりよく生きる”ためのパターン・ランゲージを制作

慶應義塾大学 SFC 研究所 井庭崇研究室は、認知症とともによりよく生きることを実践する工夫をまとめたパターン・ランゲージ『旅のことば - 認知症とともによりよく生きるためのヒント』を制作しました。これは、認知症を受け入れつつよりよい人生を生きるために、本人、家族、周囲のそれぞれが、具体的にどのような行動を起こすことができるのかを記述したものです。これにより、認知症であってもいきいきと暮らしている人たちの「前向きで実践的な工夫」を広く紹介・共有し、多くの方がより前向きに暮らしていけるようになること、また、認知症とともに生きることについて社会的な対話を促すきっかけをつくることを目指しています。本成果については、10月31日(金)に会見をひらくとともに、11月に行われる各種イベントで展示・発表、および冊子の配布をいたします。ぜひご取材ください。

会見・展示・発表の情報

- ▷ 『旅のことば - 認知症とともによりよく生きるためのヒント』完成披露会見
日時: 2014年10月31日(金) 15:00 - 16:00 ※井庭崇准教授が発表・解説します。
場所: 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター(GLOCOM)
〒106-0032 東京都港区六本木 6-15-21
井庭崇研究室「旅のことば」プロジェクト(tabinokotoba@sfc.keio.ac.jp)にメールにてお申込みのうえ、当日直接会場にお越しください。
- ▷ 「認知症フレンドリー社会をどのように実現するのか？」(ダイアログ・セッション)
日時: 2014年11月4日(火) 13:00 - 16:00 ※井庭崇准教授が登壇します。
場所: 富士通デザイン・HAB-YU platform
〒106-0032 東京都港区六本木 1-4-5 六本木アークヒルズ サウスタワー3F 311
お申込み: web サイトからお申込みください。 <http://www.glocom.ac.jp/events/623>
- ▷ G8 認知症サミット日本後継イベント(ブース展示)
日時: 2014年11月5日(水) 09:30 - 17:30
2014年11月6日(木) 09:30 - 17:00
場所: 六本木アカデミーヒルズ(カンファレンスルーム 7)
〒106-6149 東京都港区六本木 6-10-1 六本木ヒルズ森タワー49 階
お問合せ: http://www.ncgg.go.jp/index_dementia2014.html
- ▷ 「認知症パターン・ランゲージによる対話のワークショップ」
日時: 2014年11月16日(日) 14:00 - 16:30
場所: 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター(GLOCOM)
〒106-0032 東京都港区六本木 6-15-21

▷ SFC Open Research Forum (ORF) 2014 井庭研究室 ワークショップ・ブース
 日時:2014年11月21日(金), 22日(土)
 場所:東京ミッドタウン ホール(ミッドタウンイースト地下1階)
 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-7-1

『旅のこぼれ — 認知症とともによりよく生きるためのヒント』

(慶應義塾大学 井庭崇研究室 × 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ)



旅のこぼれ
認知症とともによりよく生きるためのヒント

Words for a Journey — The Art of Being with Dementia

慶應義塾大学 井庭崇研究室 × 認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ
Iba Laboratory, Keio University • Dementia Friendly Japan Initiative

旅のこぼれ

[本人]	[家族]	[みんな]
<ul style="list-style-type: none"> 2 旅への一歩 3 出発のあいさつ 4 旅の計画 5 旅の仲間 6 できることリスト 7 自分の日課 8 自分をあらわす言葉 9 なじみの居場所 10 よい先輩との出会い 11 流れを変える 12 今を楽しむ 13 自己紹介グッズ 14 自分なりの表現 15 ことばのギフト 	<ul style="list-style-type: none"> 16 とともに歩む 17 チームリーダー 18 我が家専門家 19 三種のつなぎ 20 さりげない告白 21 活躍の機会 22 夢への準備 23 おもしろ化 24 いつものおしゃべり 25 見えている世界 26 自分の時間 27 切り替えの工夫 28 福みのつづき 29 特別な日 30 いろんな世代 31 わくわく実行委員会 32 小さな気づき 	<ul style="list-style-type: none"> 33 自分の仕事から 34 その場の助っ人 35 見守りサポーター 36 個人的なつきあい 37 ないまぜのイベント 38 仕事を続ける 39 声を届ける 40 ウォーム・デザイン



 No.9

なじみの居場所

家族も知っている外出先をつくる。



外に出るよりも、家にいることが多くなりました。

▼そのとき

認知症だからといって、ずっと家のなかにはいるのは気が滅入ってしまいます。同じ場所に居続けるのはストレスが溜まりやすいものだからです。しかし、あちこち自由に出かけようとする、家族が心配するかも知れません。もしかしら出先で状況がわからなくなり、困ってしまうという事態が起きてしまう可能性があるからです。

▼そこで

自分ひとりで行って、家族も知っている行きつけの場所をつくります。すでにそのようなお気に入りの場所があるのであれば、そこを自分の「なじみの居場所」だと家族に伝えておきます。そういう場所を思いつかない場合は、家の近くの喫茶店や小さな美術館など、居心地のよさそうな場所を探すことから始めます。家族や親しい知人と一緒に探すと安心です。よさそうな場所が見つかったら、その場にいる店員さんや常連さんたちに、ひとこと挨拶をしておくとお互いなじむことができます。

▼そうすると

家のほかに居心地のよい場があることで、豊かな時間を過ごすことができます。また、他の人とともにする時間も増えるでしょう。家族にとっても、いつものなじみの居場所にいるとわかっていれば安心です。万が一、認知症の症状が出て困ったとしても、なじみの店員さんや常連さんがいれば、状況を理解して対応してくれるでしょう。

▷ 34. その場の助っ人 

▷ 36. 個人的なつきあい 

■『旅のことはば – 認知症とともにによりよく生きるためのヒント』とは

『旅のことはば – 認知症とともにによりよく生きるためのヒント』は、認知症とともにによりよく生きることを実践する工夫をまとめたものです。社会の多くの人が認知症に対して負のイメージを持っているなか、認知症であっても、認知症とともにによりよく生きている人、あるいは生きようとしている人たちがいます。そのような方々からお話を伺い、「認知症とともにによりよく生きる」ための工夫を探り、記述しました。

より具体的に言うと、認知症を抱える本人や家族、そして周囲の人たちが、それぞれの「状況」において抱えがちな「問題」がどのようなものであり、それをどのように「解決」することができるのか、ということをもとめています。このような工夫を知ることで、直面している問題を解決したり、これから直面するかもしれない問題を事前に回避したりすることができるようになります。

■工夫を共有するための「ことはば」

『旅のことはば』には、ひとつ大きな特徴があります。それは、「前向きで実践的な工夫」の一つひとつに対して、名前をつけているという点です。例えば、「本人がひとりで行って、家族も知っている行きつけの場所をつくる」という工夫には、《なじみの居場所》という名前をつけています。「自分にまつわる写真を持っておいて、それを見せながら自己紹介をする」という工夫は、《自己紹介グッズ》と名づけています。これは「パターン・ランゲージ」の特徴であり、このようにそれぞれの工夫を「ことはば」としてまとめることで、日常のなかで他の人の知恵を使うことが促進されます。



■「新しい旅」という捉え方

認知症になるということは、少し視点を変えてみると、これから大きく生活を変えるからこそ実現できる「新しい旅」がはじまるのだと考えることもできます。家族と一緒にいる時間が増えることで、これまで以上にお互いのことが理解し合えるかもしれません。これから過ごす時間は、何かを失っていく時間ではなく、これまで得られなかったものを得て、これまでなかったものをつくっていく時間であると捉えることができるのです。そして、そのかけがえのない時間をどのように生きるのかは、自分たち次第です。このように「認知症とともにによりよく生きる」ことを、ひとつの「新しい旅」と捉え、その工夫をまとめたことはばを、私たちは「旅のことはば」と呼ぶことにしました。

■立場を超えた「協働」を実現する

『旅のことはば』では、[本人]の旅のことはば、[家族]の旅のことはば、[みんな]の旅のことはばという、視点の違う3つのグループに分かれて工夫が記述されています。それぞれのグループには、その立場において抱えがちな「問題」とその「解決」のための工夫がまとめられています。まずは自分の立場のものから読み

はじめるとよいのですが、他のグループの「旅のことば」を読んでみることで、それぞれの立場で抱える問題や、それを解決した先にある前向きな未来を垣間みることができます。こうして本人・家族・みんなが互いに支え合いながら「認知症とともによりよく生きる」ことができるように、『旅のことば』はつくられています。本書の「旅のことば」が、みんなで知恵を寄せ、よりよく生きることを実現するためのひとつの手段となれば幸いです。

■「旅のことば」の記述形式である「パターン・ランゲージ」とは

パターン・ランゲージは、建築家クリストファー・アレグザンダーが提唱した知識記述の方法です。アレグザンダーは、町や建物に繰り返し現れる関係性を「パターン」と呼び、それを「ランゲージ」(言語)として共有する方法を考案しました。彼が目指したのは、誰もがデザインのプロセスに参加できる方法でした。ある「状況」で生じる「問題」をどのように「解決」すればよいのかという実践的な知を記述するパターン・ランゲージの方法は、ソフトウェア開発や、創造活動一般を支援する方法として広がっています。

慶應義塾大学総合政策学部 井庭崇准教授は、パターン・ランゲージの方法を創造的な人間行為の支援に応用し、国内外で先導的な立場で研究・実践を進めています。これまでに制作した主なものとしては、創造的な学びを行うための「ラーニング・パターン」、創造的なプレゼンテーションをつくるための「プレゼンテーション・パターン」、創造的なコラボレーションを実現するための「コラボレーション・パターン」、*“いきいきと美しく生きる”*ための「Generative Beauty Patterns」、大地震への備えと緊急時の行動のための「サバイバル・ランゲージ」などがあります。このうち、『プレゼンテーション・パターン』は書籍としても出版されており、2013年度のグッドデザイン賞を受賞しています。

■本プロジェクトについて

本成果は、井庭崇准教授と井庭研究室の学生に加え、国際大学 GLOCOM、株式会社富士通研究所、コクヨ S&T 株式会社、大日本印刷株式会社など、認知症フレンドリージャパン・イニシアチブを支援する企業のメンバーが、従来の医療・福祉系の枠組みを超え、認知症にかかわる課題検討の一環として、参加したプロジェクトにより生まれました。

日本の65歳以上の方のうち、軽度の認知障害を持つ人までを含めれば、その数は800万人を越えると推定されています。これは、65歳以上の約4人に1人、日本人全体でみると約15人に1人という計算になります。また、2025年には日本の人口の25%が75歳以上の超高齢化社会となり、介護・医療のバランスが崩れることが懸念されています。慶應義塾大学 井庭崇研究室は、今後も、企業・NPO・政府等と協力・連携しながら、人々の生きる力を支援するパターン・ランゲージの制作を進めてまいります。

*ご取材の際には、事前に下記までご一報くださいますようお願い申し上げます。

*本リリースは新聞各紙社会部、web ニュース等に送信させていただいております。

このプレスリリースに関するお問い合わせ先

慶應義塾大学 井庭崇研究室「旅のことば」プロジェクト

E-mail: tabinokotoba@sfc.keio.ac.jp

慶應義塾大学湘南事務室学術研究支援担当 河越、西村、加藤

〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤 5322

TEL: 0466-49-3436 / FAX: 0466-49-3594 / E-mail: kri-pr@sfc.keio.ac.jp